

日本語オノマトペの仏語訳研究  
-宮澤賢治童話を資料として-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-03-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 瀬川, 愛美 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/22272">http://hdl.handle.net/10291/22272</a>

2022年1月8日

## 「博士学位請求論文」審査報告書

審査委員 (主査) 商学部 専任教授

氏名 高 遠 弘 美

(副査) 法学部 専任教授

氏名 鈴 木 哲 也

(副査) 文学部 専任教授

氏名 小 野 正 弘

1 論文提出者 瀬川 愛美

2 論文題名 日本語オノマトペの仏語訳研究  
- 宮澤賢治童話を資料として

(英文題) Japanese Onomatopoeic Representations and their Translations into  
French: Focused on Novels by Kenji Miyazawa

### 3 論文の構成

論文の構成は、以下の通りである（章以下の構成は省略し、論文の概要のなかで説明する）。

#### 第1部 日仏オノマトペ対照研究の視点と構想

- 第1章 日仏オノマトペ対照の視点
- 第2章 日本語オノマトペ翻訳研究の構想
- 第3章 日仏オノマトペ翻訳研究としての宮澤賢治
- 第4章 日仏オノマトペ対照の研究史展望

#### 第2部 宮澤賢治童話におけるオノマトペ仏語訳の記述的研究

- 第1章 『セロ弾きのゴーシュ』と Gauche le violoncelliste
- 第2章 『銀河鉄道の夜』と Train de nuit dans la voie lactée
- 第3章 『風の又三郎』と Matasaburo, le vent

#### 第3部 日本語オノマトペの仏語訳

- 第1章 宮澤賢治のオノマトペの仏語訳の評価基準
- 第2章 基本要素末の促音と促音付加・挿入の仏語訳

第3章	基本要素末の撥音と撥音付加の仏語訳
第4章	「り」付加の仏語訳
第5章	長音付加と挿入の仏語訳
第6章	繰り返しの仏語訳
終章	結論

#### 4 論文の概要

本論文は、宮澤賢治童話3作品の仏語訳において、原文の日本語オノマトペが、どのように訳出されるかについて、記述的に調査・分析し、さらに、オノマトペの訳出について、特に、原文におけるオノマトペ特有のニュアンスが仏語訳として表現できているかを評価したものである。

第1部は、「日仏オノマトペ対照研究の視点と構想」の部であり、総論として位置づけられる。

第1章「日仏オノマトペ対照の視点」においては、日本語学における「オノマトペ」という術語と、そのフランス語の原語である *onomatopée* との意味の異同を確認し、前者は、擬音語と擬態語を包括するのに対して、後者は、基本的に擬音語しか指し示さないことを確認している。また、日本語オノマトペの形態的特性としての、「Xっ」型、「Xん」型、「Xり」型、「X2」型の持つニュアンスを整理して、次章以下における、日本語オノマトペ仏語訳の整理・分析に備えている。

第2章「日本語オノマトペ翻訳研究の構想」では、日本語オノマトペの翻訳を検討することで、翻訳の観点、対照言語学の観点、日本語教育学の観点から、可能となることを述べ、それらを学際的に統合することで、客観的で幅広い知を構築することができるかと結んでいる。

第3章「日仏オノマトペ翻訳研究としての宮澤賢治」では、宮澤賢治作品におけるオノマトペの特性を瞥見したのち、同作品の仏語訳ならびに仏語訳解説本の数々を確認して、宮澤賢治作品におけるオノマトペの仏語訳の検討がなぜ重要かについて示唆する。

第4章「日仏オノマトペ対照の研究史展望」では、従来の日仏オノマトペの対照研究を鳥瞰し、注目すべき点と問題点を指摘している。

最後に、第2部で取り上げるべき、宮澤賢治童話について検討し、名訳と定評のある Hélène Morita による *Train de nuit dans la Voie lactée*, *Le Serpent à Plumes*, 1995 の中の、

- Gauche le violoncelliste セロ弾きのゴーシュ
- Train de nuit dans la Voie lactée 銀河鉄道の夜
- Matasaburo le vent 風の又三郎

の3作品が対象として好適であることを示している。

第2部は、「宮澤賢治童話におけるオノマトペ仏語訳の記述的研究」の部であり、上述3作品におけるオノマトペの仏語訳を、個別的に検討する。

第1章『『セロ弾きのゴーシュ』と Gauche le violoncelliste』では、『セロ弾きのゴーシュ』で用いられている、83種(異なり)、123回(延べ)のオノマトペを、頻度と形式の面から整理し、オノマトペの形態パターンとそれが有するニュアンスごとに、その仏語訳を具体的に検証する。たとえば、オノマトペの基本要素に、促音「っ」が付加された場合、日本語においては、基本要素の意味に、〈瞬間性〉〈急転性〉〈一区切り性〉というニュアンスが加わる。「どきっ」であれば、「どき」の〈驚き、恐れ、期待などで瞬間的にはげしく動揺するさま〉に、促音が付加されることによって、それが、瞬間的に起こるというニュアンスが付加される。このような原文のニュア

ンスが、仏語訳においても示されているかを、ひとつひとつ丹念に検証し、重要な例は、引用して説明している。「どきっ」の場合であれば、仏語訳の *en sursautant* 〈思わず飛び上がりながら〉に対応するので、促音付加の〈瞬間性〉〈急転性〉のニュアンスが読み取れる、と評価する。同様の検証を、撥音「ん」の付加、長音「ー」の付加、反復等について行っている。さらに、漢語系オノマトペの訳出、特殊なオノマトペの訳出についても検討したのち、原文のオノマトペが持つ擬音性と擬態性が、仏語訳の際、いかなる文法性に対応するかについても整理している。

第2章『『銀河鉄道の夜』と *Train de nuit dans la voie lactée*』でも、如上の分析が踏襲され、『銀河鉄道の夜』に用いられている、101種（異なり）、235回（延べ）のオノマトペを、頻度と形式の面から整理し、オノマトペの形態パターンとそれが有するニュアンスごとに、その仏語訳を具体的に検証する（以下の分析は、前章と同様なので、省略に従う）。

第3章『『風の又三郎』と *Matasaburo, le vent*』でも、同様の分析が行なわれ、『風の又三郎』に用いられている、142種（異なり）、280回（延べ）のオノマトペを、頻度と形式の面から整理し、オノマトペの形態パターンとそれが有するニュアンスごとに、その仏語訳を具体的に検証する。（同じく、以下の分析は、前章と同様なので、省略に従う）。

第3部は、「日本語オノマトペの仏語訳」の部であり、もとの日本語オノマトペの持つ、ニュアンス別に、それぞれが、どのくらい仏語訳として訳出できているかを検証する。

第1章「宮澤賢治のオノマトペの仏語訳の評価基準」では、コセリウの翻訳理論を援用しながら、オノマトペの翻訳においては、翻訳元のオノマトペの持つ「出来事」と「ニュアンス」を、翻訳先の言語で再現しているかどうかを確認することが重要であるとした。

以下、第2章「基本要素末の促音と促音付加・挿入の仏語訳」では、促音「っ」の持つニュアンス、第3章「基本要素末の撥音と撥音付加の仏語訳」では、撥音「ん」持つニュアンス、第4章「「り」付加の仏語訳」では、「り」の持つニュアンス、第5章「長音付加と挿入の仏語訳」では、長音「ー」の持つニュアンス、第6章「繰り返しの仏語訳」では、基本要素の2回以上の繰り返し、について、総合的な評価を行なっている。採りあげられたニュアンスは、〈固定性〉〈瞬間性〉〈急転性〉〈一区切り性〉〈滞留性〉〈時差性〉〈余韻性〉〈残存性〉〈延長性〉〈持続性〉〈完結性〉〈ひとまとまり性〉〈反復性〉の13項目である。結論では、さらに、それらを可視化した表を作成して、各作品における訳出と、総合的な評価が一覧できるようにしている。さらに、日本語オノマトペを仏語訳するときの注意点、日本語オノマトペを日本語母語話者に教育する場合の教案、今後の課題が述べられている。

## 5 論文の特質

本論文の特質として、第一に、分析の手順が着実であることを挙げることができる。オノマトペの日仏における定義の異同を確認し、先行研究を咀嚼し、宮澤賢治の童話におけるオノマトペが研究対象として最適であることを確認したのちに、具体的な作品を選定し、オノマトペの例を採集して整理し、都合1,300例になんなんとする、日本語ならびフランス語の例文をひとつひとつ丹念に検討し、その「出来事」と「ニュアンス」の側面を振り分け、最終的に、日本語オノマトペの特質と言うべき「ニュアンス」の側面が仏語訳しえているかを評価して、結論とする。実にオーソドックスに、分析手順を流れるように推し進めていることが分かる。第二に、高い記述性を有することが挙げられる。採りあげた宮澤賢治童話三作品は、いずれも、定評のあるもので

あって、そこに使用されているオノマトペの整理されたデータは、日本語学、日本文学にとっても、貴重なものである。第三に、日本語オノマトペの理論的分析方法をよく採りいれていることが挙げられる。日本語オノマトペの形態的特徴の持つニュアンスを整理する際の理論を、よく理解したうえで効果的に運用している。第四に、新規の課題に果敢に挑戦し、これまでに見られなかった成果を挙げている点が指摘できる。今回行った、日本語オノマトペの仏語訳を、「出来事」と「ニュアンス」に分解し、特に、ニュアンスの側面に注目して訳出の評価まで行ったものは、かつてなく、新規課題ゆえの、さまざまな困難にも逢着しながら、よくそれを乗り越えて新たな分析の地平を切り拓き、興味深い結論を得るにいたっている。

## 6 論文の評価

本論文の評価は、上述の特質と結びつくところが多い。すなわち、分析の手順が着実であるということは、本論文の説得力を高めていて、着実に積み重ねたデータの集積と整理に基づく所論は、今後の指標ともなるものである。また、堅実な基礎的分析に基づいて行われている第三部の総合的なオノマトペ仏語訳の評価も、今後に資するところが大きく、高く評価される。

とはいえ、若干の問題点もないわけではない。たとえば、〈固定性〉、〈瞬間性〉、〈急転性〉などの評価基準において、わずかに定義に曖昧さが残っている点、また、ニュアンスが訳出されているかどうかについての認定手順、論拠の提示方法など、さらなる先鋭化が必要かつ可能ではある。が、そのような諸点は、むしろ本論文を出発点として、今後の長い研究生活において克服されていくべきものであって、本論文にとっての決定的な瑕疵とはなりえない。

それ以上に、ともすれば論者の「主観」の披瀝に終わりがちな「詩的言語」の分析に、客観的な指標が導入されていて、詩その他のいわゆる文学的テキストを「科学的」に分析する方法論のヒントが示唆されている点のほうを重視して評価すべきである。

総合的な評価としては、「オノマトペ」という日本語とフランス語で定義そのものが違う学問的概念の橋渡しをし、日仏双方向の語学教育に資する面を併せ持つすぐれた研究であると言える。さらに具体的には、名訳と讃えられる宮澤賢治の仏語訳三篇を対象に、既存の研究の成果を十分に生かしつつ、新たな視野を開く意欲的な研究であり、今後の日仏のオノマトペ研究の発展に寄与するものと評価できる。

## 7 論文の判定

本学位請求論文は、教養デザイン研究科において必要な研究指導を受けたうえ提出されたものであり、本学学位規程の手続きに従い、審査委員全員による所定の審査及び最終試験に合格したので、博士（学術）の学位を授与するに値するものと判定する。

以 上

主査氏名（自署）